



企画展

のびる・ひらく・ひろがる 植物がうごくときの裏話

主任学芸員 芦谷美奈子(水生植物学)

琵琶湖博物館では、7月17日から約4ヶ月にわたって、第12回企画展「のびる・ひらく・ひろがる 植物がうごくとき」を開催しました。動かないように見える植物が、本当はダイナミックな動きの中で繁殖していることをテーマにした企画展です。

植物は地味に受け取られがちですが、その世界をのぞいてみると、面白いことがたくさんあり、それらを紹介しました(詳しくは、「うみんど」第31号の特集をご覧ください)。入場されたお客様には、さまざまな感想をいただきましたが、概して好評だったと考えています。

ハンズ・オン展示

ところで、この企画展には、実はもうひとつのテーマがありました。それは、「ハンズ・オン」展示です。実際に展示場に来ていただいた方にはわかるよ



サクラの花模型の組み立て



オオオナモミの拡大模型

うに、植物をテーマに、標本とグラフィック(解説文)以外に、さまざまな参加体験型の展示物が並んでいました。これらが、「ハンズ・オン」という手法を用いた展示なのです。琵琶湖博物館では、準備室時代から、この「ハンズ・オン」に興味を持って展示を製作したり、研究プロジェクトを進めたりしてきました。その成果を、今回の企画展で試すことになりました。

まず、ハンズ・オン展示は、実際に人が触れたりするものなので、耐久性が問題となります。今回は、一部の展示(「ひらく」ゾーンのサクラの花模型や、「ひろがる」ゾーンのオオオナモミの拡大模型)については、企画展が始まる前から、プレ展示を行い耐久性を調べ、その結果によって本番の設置までに手を加えました。

また、企画展が公開されてからも、観覧者のみなさんの様子を観察したりしながら、展示を改良したり、説明文を追加した



ササユリのオシベにチョウを近づけると...

りしました。それでも、うまく機能しない展示物もあり、特に「ハンズ・オン」の手法を用いると、展示物を製作しただけでは不十分で、事前の確認はもちろん、公開後の改良を前提にしないといけないことがよくわかりました。

有効性を調べる実験

耐久性や機能性の改善だけではありません。この企画展では、「ハンズ・オン」について、2つの実験をこころみしました。

ひとつは、「ひつつきむし」のコーナーで、オオオナモミの拡大模型を置いた場合と、本物のオオオナモミを置いた場合のお客様の反応の違いを調べ、どちらの手



いろいろな形のタネを飛ばす

法がこちらのメッセージをより伝えられるか調べました。もうひとつは、「飛ぶタネ」のコーナーで、既成の模型のタネを飛ばすのと、お客様自らタネを作って飛ばす場合では、展示の効果がどう違うかを調べました。

結果はいずれ別の機会に発表しようと思っておりますが、展示というコミュニケーション・メディアの難しさと面白さを実感し、ハンズ・オン展示の必然性についても考えることができ、展示を作った側にとって非常に有難い興味深い機会を持つことができました。

会期中、会場をおとずれて、展示に触れてくださった皆様、様々な感想を残してくださった皆様、特に調査でインタビュアーに協力してくださった皆様に、改めて御礼を申し上げます。どうもありがとうございました。